

談話のダイナミックな性質を再考する

天本 貴之 (Takayuki AMAMOTO)

慶應義塾大学

談話の意味を理解するとはどういうことか。たとえばヒトの言葉には照応という、二つの表現（の意味）がつながりをもつ現象がある。この照応現象は談話のダイナミックな意味の好例としてよく考察されるが、そもそも照応とは何かを理論中立的に説明するのは難しいという指摘もあり、事実、各説明手法によって照応現象の捉え方が割れているといっている。したがって、そもそも談話のダイナミクスをどのように考えるかが依然として問題になっている。

この発表では、意味論的に有名な照応データを扱う研究から、談話の意味のダイナミックな性質を明らかにする手掛かりを見つけることをめざす。具体的には、近年の動的意味論における分析提案などを参考に、Rothschild and Yalcin [1] で提案されている談話レベルのダイナミックな性質を再考する。[1] が述べる談話のダイナミクスとは、談話全体の真理条件はその談話を構成する各文の真理条件の総和とはみなせない、という比較的シンプルなものである。しかし、近年の動的意味論の研究から示唆されるのは、やはり真理条件とは別の何かは談話のダイナミックな意味理解には必要だということである。したがって [1] による談話のダイナミクスをより具体的に（あるいは別の観点から）書き換えることができるのではないかと考える。

たとえば動的述語論理をベースとして照応を分析する Keshet [2] では、談話マーカだけでなく、これまで使われてきたアップデートも状態ストックとして格納し、アップデートの再利用を可能にすることでシステムの分析範囲を技術的に拡張している（そしておそらく、DRT ベースの Venhuizen, *et al.* [3] も似たようなコンセプトを持っている）。このアイデアは、一度定義されたプログラムはその後も再利用可能であるというプログラミング言語の考えに基づいている。アップデートをストックし、再利用するという考えは特に分配読みが求められる照応のケースで相性がよいように思う。動的意味論をベースに照応を説明するアプローチでは、束縛関係を用いることで二つの表現の形式リンクを明示できる点に強みがある。しかしアップデートをストックするという手法はある意味で語用論的に実行できるようにも映り、ダイナミクスを意味論と語用論のどちらをベースにして考えるかという、近年の動的意味論をめぐる問題にもかかわっていて興味深い。このような点も踏まえながら、談話のダイナミクスについて論じられればと思う。

- [1] Rothschild, D. & Yalcin, S. 2016. Three notions of dynamicness in language. *Linguistics and Philosophy* 39, 333–355.
- [2] Keshet, E. 2018. Dynamic Update Anaphora Logic: A Simple Analysis of Complex Anaphora. *Journal of Semantics* 35, Issue 2, 263–303.
- [3] Noortje J Venhuizen, Johan Bos, Petra Hendriks, Harm Brouwer. 2018. Discourse Semantics with Information Structure. *Journal of Semantics* 35, Issue 1, 127–169.